

本発表の目的は、日本語の〈こと〉と〈もの〉の視点から倫理（学）を再考することである。〈もの〉と〈こと〉の哲学的考察は、和辻哲郎の「日本語と哲学の問題」（1928年執筆、1935年加筆）に始まる。そこではハイデガーの『存在と時間』（1927）を背景として、〈あるということ〉（存在一般）と〈あるもの〉（存在者）の区別において、〈もの〉は〈こと〉にこそ基づくと、〈こと〉の優位が宣言された（Cf. 和辻 1935）。以来、関心や背景は同じでないが、〈こと〉優位の議論が現在までの主流である。倫理学も字義から言えば人と人との関係の理（ことわり）に関する学である。社会で人々は各々の（母親・教員・学生といった）役を演じることになっている。私たちが男女等であることはおろか、人間であることさえ、現代社会の決まりごと・約束ごとに従っているにすぎず、倫理的な規範とは、そういう決まりごと・約束ごとに従った〈ごっこ〉であると言えないか。〈こと〉に切り詰められ、特定の〈こと〉が固定化されることで、私たちはそこに縛られる。意志・欲求や責任をもつこと、理性や共感性をもつこと、健常者／障害者等々であること、そういうことこそ、人間であることなのだ。本発表は、〈こと〉に汲み尽くされない〈もの〉という観点を中心に倫理を再考したい。予定としては、まず（1）主流の〈こと〉優位の視点ではなく、〈もの〉を基盤とする視点から〈こと〉と〈もの〉の意味を明確にし、つぎに、（2）〈こと〉的視点を中心に、人間の社会・倫理を再考し、〈人間（であること）〉を一つの〈ごっこ〉的な仮構（ないし仮面（ペルソナ））として相対化する。最後に、（3）〈人間である〉という〈こと〉（ないし言葉）、倫理的〈ことわり〉に汲みつくされない生の位相としての〈もの〉とその意義を指摘したい。